

V・E・フランクルの生涯と思想 (一)

——幼・少年時代から收容所抑留直前(ナチスのオーストリア侵攻)まで——

廣岡義之

第一節 早熟な幼・少年時代

一、両親について

フランクル (Victor Emil Frankl, 1905-1997) は一九〇五年三月二十六日、兄のヴァルターと妹のステラに挟まれた第二子としてオーストリアの首都ウィーンで産声をあげた。フランクルの母エルザは、プラハの貴族の由緒正しい家系の出身である。彼女は一二世紀に活躍した聖書などの解釈をしたユダヤ人の末裔であり、また同時に有名なプラハの偉大なラビ(ユダヤ教の教師)の子孫でもあった。さらに叔父には、オズカー・ヴィーナーという詩人もいた⁽¹⁾。フランクルの母は心優しい信心深い女性であったのに対して、フランクルの父ガブリエルは性格的には非常に厳格で、自らの信条を持ちかつそれに忠実な人であった。それを物語る逸話として、子どもの頃にフランクルと彼の兄の二人は、毎週金曜日の夜、ヘブライ

語で祈禱書一章を朗読するように父に命じられたほどであった。彼の父は少々かんしゃく持ちであったけれども、フランクル自身は父を「正義の人」と理解していたようである。しかも父はいつも子どもたちを外から守ってくれる存在であったとフランクルは回想しているところからも、父子の間には十分な信頼関係が保たれていたようである⁽²⁾。

父ガブリエルは、当時オーストリア・ハンガリー帝国の一部であった南モラビアの出身で、貧しい製本工の家庭の息子として育った。彼は苦学しながら医学部の勉強を修了したが、経済的な理由から医師の道を断念し国家公務員にならざるをえなかった。つまりフランクルは、貴族の家系の母と、医師を志望しながら断念せざるをえなかった公務員の父の間に生まれ育ったことになる⁽³⁾。

フランクルの父は大臣の個人秘書として二五年間、児童青少年の保護育成部で働いていたのだがこの関連で、フランクルが二四歳の医学生るときに次のような興味深い実践を試みている。フランクル

は抑うつ状態にあった若者のための「青少年相談所」を開設し、学生や失業者の相談活動を開始した。フランクルがこの相談活動を開始した動機の一つは、父親の仕事の影響によるものだと述べている。

二 早熟な幼年時代

フランクルが産声をあげたウィーンのツェルニンガッセ六番地の近くに位置する七番地には、個人心理学の創始者アルフレッド・アドラー (Alfred Adler, 1870-1937) が住んでいた。ウィーン第三学派であるフランクルの「ロゴセラピー」誕生の地は、それゆえウィーン第二学派であるアドラーの「個人心理学」誕生の地と近い場所にあったという事実は、二人の学問的関係を暗示して極めて興味深い。

フランクルは第二次世界大戦後、あるテレビインタビューで、アドラーの「個人心理学」についての質問を受け次のように答えている。フランクルはウィーン市内のある通りの七番の家を示し、そこはかつてアドラーが居住し仕事をしていた場所であることを紹介した。そしてその向いの六番の家がフランクル自身の生家で、強制収容所に送られる一九四二年まで居住していたと述べているが、この発言はフランクルとアドラーの学理的関係を象徴する興味深いエピソードである。つまり両者の思想はちょうど反対側に位置するものの、距離的にはもっとも近いのだとフランクルはわれわれに伝えたかったのだろう。

フランクル自身によれば、彼は既に三歳のときに医者になる決心をしており、父もまたそのことを好ましい思いで見守っていたという。また四歳頃の思い出として、フランクルが眠りに入る直前に飛び起きて「自分もいつかは死ななければならない」と気付いた記憶があるという。そしてさらにその頃のフランクルを苦しめたのは、死への恐怖ではなく人生の無常性や人生の意味を無にしてしまうのではないかという問いであった。このようにフランクルは幼い時から、自分のなすべきことは死を恐れることではなく、人生の小さな死を無意味にするかどうかを問うことであつたと回想している。

一九〇〇年に没したニーチェは、二〇世紀への予言としてニヒリズムの到来を告げたが、その五年後に生まれたフランクルは、いわばニヒリズムの幕開けとともに彼の人生を出發させた。その意味でもフランクルの生涯は「ニヒリズムとの闘い」であり、フランクルは幼年期からこうした問題意識をしっかりと育んでいたと言っても過言ではない。

人生のはかなさや無意味さを直観していたフランクルであるが、その問題を克服する端緒として以下のフランクルの原体験は実に興味深い。フランクルが五歳の頃、「外部から庇護されている」という安心感が、彼自身の生活の環境から贈られたものであると既に感じていた。それは避暑地のハインフェルトに滞在したときの経験に由来するもので、ある晴れた朝に目覚めたフランクルは、まだ目を閉じたまま、安心して見守られ庇護されているという感情に包まれ

ていたと述懐する。その感情は、自分が目を開けると父が微笑みながらフランクルをのぞきこんでいたという記憶に依るものである。¹⁰⁾

三 優等生としての中学・高校生時代

少年時代のフランクルは、ヴィルヘルム・オストヴァルト

(Wilhelm Ostwald) やテオドール・フェヒナー (Gustav Theodor Fechner) などの自然哲学者たちの思想に夢中になっていたという。彼らの自然哲学の思想に影響されつつ、フランクルは、大宇宙にも小宇宙にも普遍的な「調整原理」が支配していることを確信していた。このような考え方は、後に彼のデビュー作『医師による魂の癒し』(邦訳名『死と愛』)のなかにも根づいた彼独自の思想となって開花することになる。¹¹⁾ 中等学校の低学年から優等生で、既にその頃から彼独自の道を歩み始めていたフランクルは、「応用心理学」を勉強しようと国民大学へ通い始め、さらに「実験心理学」にも興味を持つようになったという。¹²⁾

一五、六歳の頃のフランクルは、哲学の勉強も始めていたが思想的にまだまだ未熟で心理学主義的な誘惑から脱しきれていなかった。高等学校の卒業論文としてショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) の病跡を扱った「哲学的思考の心理学について」と題した論文を作成している。こうした「心理学主義的な誘惑」にさらに「社会学主義的な誘惑」が加わり、フランクルは中学・高校時代を通じてずっと社会主義労働者青年団の役員を務

め、そして一九二四年には、「全オーストリア社会主義中高校生連盟」の代表理事も担当していた。¹³⁾

第二節 心理学の双璧フロイトとアドラーとの対峙

一 フロイトからの影響

高等学校時代に入ると、フランクルはじょじょにフロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) の「精神分析」に興味を持つようになり、「精神分析」に関連する論文を執筆し始める。「精神分析」とは人間の生活を潜在意識内に抑圧された「性欲衝動」(リビドー)の働きであると考ええる立場である。大胆にも、高校生だったフランクルは一六歳の頃に、当時既に著名であったフロイトと書簡のやりとりを始めている。このやりとりはフランクルの高等学校卒業後もずっと続いていた。フランクルが一九歳のとき、「仕草による肯定と否定の成り立ちについて」という短い論文をフロイトに宛てて投函した。そのときのエピソードは極めて印象的である。フランクルが投函した直後、今度はフロイト自身から、この論文を『国際精神分析ジャーナル』(一〇号)に掲載する旨の返事がすぐに返ってきて、そしてその翌年の一九二四年には、フランクルの原稿が実際にその学術雑誌に掲載されたのである。¹⁴⁾ フランクルはその当時からかなり水準の高い論文を執筆する能力を持っていたことをわれわれはこのエピソードから容易に把握できよう。しかし残念ながら既にそ

の時点ではフランクルの関心はフロイトの「精神分析」からアドラー(Alfred Adler, 1870-1937)の「個人心理学」に移行していた。¹⁶⁾アドラーの「個人心理学」とは、性を重視するフロイト説に対して、個人を対象として特に「権力への意志」を中心に、劣等感を補償する働きを重視した心理学であった。¹⁷⁾

さらにフランクルはフロイトとの手紙交換だけではなく、実際に一九二五年、二〇歳の医学生ときに一度ウィーンの街中で偶然フロイトと出会う経験をしている。フランクルがフロイトに気づき思いきって呼び止めると、フロイトは「ウィーン第二地区、ツェルニンガッセ六番、二五号のヴィクトール・フランクル君だね。」とフランクルの住所を即座にしかも完璧に返答したという。フランクル自身も、フロイトのこの驚異的な記憶力には圧倒されたと述懐している。¹⁸⁾

フロイトと出会った時、フランクルはもう大学生になり医学を学び始めていたが、この「出会い」は残念なことには遅すぎたという。なぜなら先述のとおり既にフランクルはアルフレッド・アドラーの「個人心理学」に影響され始めており、アドラーはフランクル二〇歳の時に執筆した学術論文「心理療法と世界観」を『個人心理学国際年報』に発表することを決定していたほどである。そして一九二五年には、医学生であったフランクルの二本目の学術論文がアドラーの仲介で刊公されることになる。同じ一九二五年、フランクルはデュッセルドルフで開かれた「国際個人心理学会」で基調講演をしているが、フランクルは既にその時点で、アドラー派内部の

正統派からかなり逸脱した理論すなわち、後のロゴセラピーに近い理論を唱えていたと回想している。¹⁹⁾

二、「人生の意味」についての哲学的問題

フランクルは精神医学一般に、そして特に「精神分析」に集中していたが、他方で哲学思想についても深い関心を寄せていた。驚くべきことにフランクルは一五、六歳の頃には既に「人生の意味」について国民大学で講演する機会をもっていた。

その当時、フランクルは二つの明確な信条を構築していた。第一の信条は、そもそもわれわれが「人生の意味」を問うべきではなく、われわれ自身が「問われているもの」であり、人生がわれわれに提出した問いに応えなければならないというものである。第二の信条は、「究極的な意味」あるいは「超意味」はわれわれの理解力を超えているということ、いや超えていなければならないということであった。一言でいえばフランクルにとって、「究極的な意味」あるいは「超意味」と呼ばれているものを探究することが人生における真の課題だったのである。²⁰⁾

このようにフランクルの個人史をたどってみると、フランクルの二つの信条は強制收容所の体験のなかで生まれたという従来の通念とは異なり、その基本的な仮説は彼が二〇歳前の青年期には、もう既に主だった骨格が形成されていたことがよく理解できよう。²¹⁾

三 現代の「ニヒリズム」と対峙したフロイト

フロイトからアドラーの理論へと傾斜しつつあった頃、アドラーとの関わりでフロイトが熟考したテーマは、特に精神療法における「意味と価値」の問題に重点をいた「精神療法と哲学の境界領域の解明」ということであった。フロイト自身も述べているように、この問題に生涯をかけて取り組んだ思想家はフロイト自身を除いてはほとんどいないだろうと言っているほどである。⁽²³⁾

こうした問題こそが、フロイト自身の全研究の背後にある主要動因である。フロイトは「病理学主義」という形で現れる精神療法の分野での「心理学主義」の克服を目指した。この「病理学主義」や「心理学主義」はいずれも、より包括的な現象である「還元主義」の一形態であり、この「還元主義」にはさらに「社会学主義」や「生物学主義」も含まれている。ここで「還元主義」とは、人間存在のある層を絶対化し他の層を考慮しない考え方をいう。たとえば「生物学主義」という場合には、本来多くの存在層の一つにすぎない「生物学的存在層」を取り出してそれを絶対化してしまう、他のすべての存在層を無視してしまうことである。そしてこの意味でこの「還元主義」はいずれにせよ、現代の「ニヒリズム」に相当する。なぜなら、あらゆる「還元主義」は人間の次元そのものや人間固有のものを、人間的なものから人間以下の平面に還元し投影してしまうからである。この意味でフロイトは現代の

「ニヒリズム」と対峙したと言っても過言ではないだろう。⁽²³⁾

四 シェーラーから影響されたフロイト

一九二七年フロイト二二歳のとき、アドラーとの関係は悪化し始める。なぜなら、フロイトはアドラーの理論よりも、個人心理学者の代表的立場にあったアラース(Rudolf Allers)とシュバルツ(Oswald Schwarz)に傾倒していったからである。さらにこの頃、フロイトは完全にマックス・シェーラー(Max Scheler, 1874-1928)の思想から決定的な影響を受け始めており、特にシェーラーの『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』(Der Formalismus in der Ethik und die materielle Wertethik, 1913-1916)を、あたかも聖書のように持ち歩くほど思想的に魅了されていたという。それゆえ、この時期のフロイトは既に彼自身の「心理学主義」を自己批判し始めていたことになる。⁽²⁴⁾

ここでフロイトがシェーラーの思想からどのように影響されたかについて簡単に説明しておきたい。フロイトの書斎の壁にはシェーラーとフロイトの写真が一对の形で掲げてあったというほど、シェーラーはフロイトに思想的な影響を強く与えている。フロイトがシェーラーを知ったのは、アドラー派内部の「自由な批判精神の持ち主」であったオーストリアの精神医学者ルドルフ・アラースを通じてであった。特に価値論を論じた上述のシェーラーの著『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』は、「心理学

主義」からの解放という点でフランクルの考え方を覚醒させた。シェーラーの「実質的価値倫理学」は、「ア・プリオリなもの」(普遍的に妥当するもの)を「理性的・形式的なもの」と同一視したカントに対して、情意的なものにもア・プリオリな価値があるとする新しい倫理学である。たとえば、愛においては価値領域が増し、逆に憎しみにおいて価値は狭まるとシェーラーは考えたが、こうした思想が後の「ロゴセラピー」などの萌芽となっていく。⁽²⁶⁾

五. 「個人心理学」の祖アドラーとの決別

一九二九年フランクル二四歳の決定的な日のことを彼は次のように描写している。問題の会議はウィーン大学歴史研究所の大講堂で行われた。フランクルの後方の列にはフロイト派の学者が数人この光景を目の当たりにしていた。なぜなら、かつてアドラー自身がフロイトの「ウィーン精神分析協会」を脱退した時と同様の事件が今まさに起ころうとしていたからである。つまりウィーン大学歴史研究所の大講堂で、アドラーからの「分離運動」が再燃し始めたのである。フランクルが支持するアラースとシュバルツは、彼らの人間的立場が「個人心理学協会」で認められなかったためにアドラーからの「決別発言」をおこなうや否や、大きな緊張感が会議室に漂ったとフランクルは述懐している。⁽²⁷⁾

アドラーはこのアラースとシュバルツの「決別発言」を支持したフランクルたちに対して以下のように反応したという。アドラー

は、アラースとシュバルツを支持したフランクルたちに向かって、「さあ英雄の君たちはどうした？」と自分たちの立場をはっきり発言したらどうかと言わんばかりに嘲った。⁽²⁸⁾そしてその夜以来、フランクルはこれまでと同じように「カフェー・ジラー」に入って、アドラーが陣取っている常連のテーブルに近づいても、アドラーはフランクルと一言も口を聞こうとせず、挨拶にもろくに応えてくれなくなったという。フランクルが無条件にアドラーの立場を擁護しなかったことがアドラーたちには許せなかったのだとフランクルは回想している。この出来事以降、フランクルは自分の議論する場を失い、個人心理学協会から正式に除名されることになる。⁽²⁹⁾

皮肉なことにアドラーの思想は、フランクルと袂を分かった一九二〇年代後半から一九三七年に亡くなるまでの一〇年間に深められ、フランクルの考え方つまり「人生の意味」や「超越性」という考え方に接近し始めた。それゆえ両者の関係が修復されることなく、アドラーがこの世を去ったことは極めて残念なことである。⁽³⁰⁾

第三節 医学生そして精神科医としての修業時代

一. 「ロゴセラピー」の始動

アドラーとの関係が悪くなった頃、フランクルはヴィッテルス(F. Wittels)たち数名の精神科医と「医学心理学術協会」を設立し、フランクルはその会の副会長に選出された。そしてこの頃に

はフランクルの思想もある程度まで体系化されていたという。⁽³⁰⁾「ロゴセラピー」という言葉が始めて使用されたのは、一九二六年（フランクル二一歳）に先の協会で講演した時である。この頃から既にフランクルはアドラーに対して批判的な態度を取り始めていたが、まだ完全にはアドラーとの関係は切れていなかったのである。もうひとつの名称である「実存分析」という術語を用いたのはフランクルが臨床活動に最も精力的に取り組んでいた一九三三年が最初であった。⁽³¹⁾

ここで「ロゴセラピー」について簡単に説明しておこう。これは、フランクルが開発した実存的精神療法の名称である。無意識に潜む人間の精神性である「ロゴス」を意識させることによって、人間の実存性を意味する「自由」と「責任」を呼び起こし、患者に人格的態度の転換を呼びかけることによって「自己超越」と「人生の意味充足」が可能となる。「逆説志向」と「脱反省」がその主な技法である。⁽³²⁾

既にフランクルは一九二九年に、三つの価値グループから「意味」を獲得する三つの可能性について構想していた。人生から「意味」を獲得するこの三つの可能性とは第一に、われわれが行う活動や創造する作品であり、第二に体験や出会い、愛などである。そして第三にわれわれが変えようのない運命、たとえば不治の病とか手術不可能な癌に直面したときですら、人間の能力のうちで最も人間的な能力である「苦悩」を「人間的な業績」に変容するという能力

を証明することによって、人生から「意味」を闘い取ることができるといふものであった。⁽³³⁾

二、「ウィーン第三学派」としての「ロゴセラピー」の使命

「ロゴセラピー」を公式に精神療法の「ウィーン第三学派」と名付けたのはヴォルフガング・スーチェックである。「個体発生（受精卵が成体になる過程）は系統発生（形態の進化）を短縮して反復する」というヘッケル（Ernst Heinrich Haeckel, 1834-1919）の有名な「生物発生の法則」の正しさがここでも証明されている。なぜならフランクルは何らかの形でウィーン精神療法の双璧である二つの学派を通り抜けてきたからである。すなわち一九二四年にフロイトの推薦で『国際精神分析ジャーナル』にフランクルの初めての学術論文が掲載されるや否や、翌一九二五年にはもうアドラーの肝いりで、彼の雑誌『個人心理学国際年報』にフランクル二本目の学術論文が載せられていたからである。すなわちフランクルという個体が生体になる過程で、フロイトとアドラーという形態発生を短縮して、ついに「ロゴセラピー」が誕生したのである。⁽³⁴⁾「ロゴセラピー」の使命とは、**人間の自由と責任の意識を呼び起こすこと**である。そしてその可能性が「精神的無意識」（これはフロイトの「衝動的無意識」を批判して成立した考え方）であり、「意味への意志」（これはフロイトの「快楽への意志」やアドラーの「力への意志」を批判して成立した考え方）である。⁽³⁵⁾

三、「下賤な精神療法」への挑戦

フランクルが「ロゴセラピー」を生み出した究極の原因とは、この「下賤な精神療法」の業界にはびこる現代の「冷笑主義」の犠牲者に対する思いであったという。ここでフランクルが「業界」というのは、精神療法が商業主義化していることを、そして「下賤」というのは学会の不潔さを示している。

精神的な苦しみを持つだけでなく、精神療法そのものによって、障害を受けた人々がフランクルのもとにやってくると、胸の締めつけられる思いがするとフランクルは告白する。実際、精神療法における「心理学主義」に由来する非人格化と、強い非人間化の傾向に対してフランクルは全身全霊で闘ってきたのである。⁽³⁶⁾

四、理論と実践の場としての「青少年相談所」の開設

アドラーによって「個人心理学協会」を除名されてから、フランクルの関心分野は理論から実践へと移行していった。一九二九年、医学生的身分のままウィーンを中心に他の六つの町で二四歳のフランクルは「青少年相談所」を設立し、心の悩みを持つ若者が無料で相談を受けられるようにした。シャルロツテ・ビューラー (Charlotte Bühler, 1893-⁽³⁷⁾) も自宅アパートを開放して、助言を求める人に面接しようとフランクルを応援してくれた。一九三〇年、学校の成績発表の時期に合わせて、初めてのカウンセリングを実施したそ

の結果、ウィーンで数年来初めて生徒の自殺者が一人も記録されなかったという。フランクルはまたこの頃、成人学校で「精神衛生学」の授業も担当している。外国でもこうした運動に対する関心が高まり、フランクルはそれに関する講演に招かれるようになる。さらにベルリンでは青少年相談に関心を持つヴィルヘルム・ライヒ (Wilhelm Reich, 1897-1957) と共に仕事をし、フランクルは相談所でもち上がる「性的問題」についてかなりの時間を割いて議論した。このように、アドラーによって「個人心理学協会」を除名されて以来、フランクルはまさに精力的に自らの「ロゴセラピー」を確立しようと活動を始めたのである。⁽³⁸⁾

五、臨床実践に没頭する精神科医修業時代

一九二〇年代後半からの約十年間、つまり二四歳から三二歳ぐらいまでの間、フランクルは精神科医として臨床実践に没頭している。一九二五年に『個人心理学国際年報』に論文を提出して以来、一九三八年に至るまでの一三年間、フランクルの文献上の業績は一つも存在しない事実から、そのことが判断できるのである。この事實は、フランクルが臨床実践活動に専念し、患者の苦悩をいかに軽減しようかという臨床医として「ロゴセラピー」の実践を重視する学級の時期であったことを物語っている。⁽³⁹⁾

医学博士の学位を取得した後、フランクルはまずウィーン大学精神医学病院で働いた。さらに神経学などの勉強をした後、最後の四

年間は主任医師としてアム・シュタインホーフ精神病院に勤務した。当時 فرانクルの担当した患者は一年間に三千人を下らなかつたという事実からも、多くの臨床実践を通してフランクルは精神科医師としての力量を磨き、「ロゴセラピー」の理論と実践を深めていたことがわれわれによく理解できるのである。

六 ナチス支配下におけるフランクルの医療活動

一九三七年フランクル三二歳の年、彼は精神・神経科の専門医としてついに独立開業するが、それもつかの間のことですぐに挫折せざるをえなくなる⁽¹⁰⁾。なぜなら、皮肉なことにフランクルが開業してから数カ月後の一九三八年三月、ヒットラーの軍隊がオーストリアに侵攻してきたからであった。ヒットラーの軍隊がオーストリアに進駐してからは、フランクルは毎日が悪夢のようであったといふ。そんな時、ロートシルト病院の神経科主任のポストが回ってきたので、フランクルはそれを引き受けることにした。というのはそれは、フランクルと彼の年老いた両親を強制収容所へ抑留されることをある程度遅らせることのできるポストだったからである。ロートシルト病院勤務の頃、フランクルは多忙を極めながらもまだ研究を続けることができた。一日に十人もの自殺未遂者が運び込まれた時期もあったという事実からも、ウィーンに残留したユダヤ人たちの精神的状況の悲惨さが容易に推察できよう。⁽¹¹⁾

(続く)

註

- (1) Vgl. Viktor Emil Frankl, *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen 2.*, durchges. Auflage, Quintessenz MMV Medizin Verlag, 1995, München, S.1.
フランクル著、山田邦男訳、『フランクル回想録——二〇世紀を生きて——』春秋社、一九九八年五月二十五日、第一刷、一二頁参照。(これ以降、原書は“Was nicht”、翻訳書は『回想録』と略記する。)
- (2) Vgl. “Was nicht” S. 3f. 『回想録』一四〇—一四五頁参照。
- (3) Vgl. “Was nicht” S. 4. 『回想録』一六頁参照。
- (4) 諸富祥彦著、『フランクル心理学入門——どんなときも人生には意味がある——』コスモス・ライブラリー、一九九七年、第二刷、一三三頁参照。(これ以降、『入門』と略記する。)
- (5) Vgl. “Was nicht” S. 7f. 『回想録』一九頁参照。
- (6) 『入門』三七—三八頁参照。
- (7) Vgl. “Was nicht” S. 9. 『回想録』二二—二三頁参照。
- (8) 『入門』一五頁参照。
- (9) 山田邦男著、『回想録』(あとがき)、訳者解説一九六頁参照。
- (10) Vgl. “Was nicht” S. 10. 『回想録』一三三頁参照。このフランクルの幼少期の原体験は、後の彼の精神科医としての信条などに結実していく。私見であるが、こうしたフランクルの原体験はまた、ドイツの著名な哲学者ボルノー(O. F. Bollnow)が無神論的実存主義を克服するために打ちたてた「新しい庇護性」(Neue Geborgenheit)という概念と非常に共通する部分が多い。
- (11) 『入門』一六頁参照。
- (12) Vgl. “Was nicht” S. 28. 『回想録』五二頁参照。
- (13) Vgl. “Was nicht” S. 38f. 『回想録』七二—七三頁参照。

- (14) 宮城音弥編、『心理学小事典』、岩波書店、一九九七年、第一八刷、二二四頁参照。
- (15) 『入門』、二四〇頁参照。フランクルは戦前に既に四本の学術論文を執筆しているが、これは彼の初めての学術論文である。ちなみに、参考のために後の三つの学術論文も年代順に列挙しておく。
- ① フランクルが高校生の時(フランクル一九歳) フロイトに私信として送り、翌年『国際精神分析ジャーナル』(一〇号、四三七〜四三八頁)に掲載された「仕草による肯定と否定の成り立ちについて」(一九二四年)
- ② その翌年(フランクル二〇歳)の時に、アドラーが創始者である『個人心理学国際年報』に掲載された二つ目の学術論文「心理療法と世界観」(一九二五年)
- ③ それから一三年のブランクを経て(フランクル三三歳)の時、ロゼンバートと実存分析の語を初めて文字にした「心理療法の精神的問題性について」(一九三八年)
- ④ その翌年の一九三九年、フランクル三四歳で執筆した学術論文「哲学と心理療法——実存分析の基礎づけのために——」(一九三九年) (Philosophie und Psychotherapie: Zur Grund einer Existenzanalyse, In: Schweizerische medizinische Wochenschrift, 69, 1939, SS. 707-709 (諸言祥彦による訳がある。))
- (16) Vgl., "Was nicht" S. 30. 『回想録』、六〇頁参照。
- (17) 宮城音弥編『心理学小事典』、三頁参照。
- (18) 『入門』、一九頁参照。
- (19) Vgl., "Was nicht" S. 40. 『回想録』、七四頁参照。
- (20) Vgl., "Was nicht" S. 36f. 『回想録』、六八〜六九頁参照。
- (21) 『入門』、三〇頁参照。
- (22) Vgl., "Was nicht" S. 39f. 『回想録』、七三頁参照。
- (23) Vgl., "Was nicht" S. 40. 『回想録』、七三〜七四頁参照。及び『入門』一六四頁参照。
- (24) Vgl., "Was nicht" S. 41f. 『回想録』、七五〜七六頁参照。
- (25) Rudolf Allers, Existentialism and Psychiatry, 1961. ルドルフ・テラーズ著、西園昌久・板谷順二訳、『実存主義と精神医学』、岩崎学術出版社、第六刷、一九七七年。
- (26) 『入門』、四〇〜四一頁参照。
- (27) Vgl., "Was nicht" S. 42. 『回想録』、七六頁参照。
- (28) Vgl., "Was nicht" S. 42f. 『回想録』、七七〜七八頁参照。
- (29) 『入門』、三七頁参照。
- (30) Vgl., "Was nicht" S. 44. 『回想録』、八〇頁参照。
- (31) 『入門』、四七頁参照。
- (32) 『回想録』、一一頁訳註参照。
- (33) Vgl., "Was nicht" S. 44. 『回想録』、八〇頁参照。
- (34) Vgl., "Was nicht" S. 44. 『回想録』、八一頁参照。
- (35) 山田邦男著『回想録』(あとがき)、訳者解説、一九五頁参照。
- (36) Vgl., "Was nicht" S. 46. 『回想録』、八四頁参照。
- (37) シャルロット・ベユラーは、ウィーン大学、南カリフォルニア大学教授で、児童心理学などの分野で貢献する。ヴェルツブルグ学派の有力メンバーの一人カール・ベユラーの妻で、夫と共にウィーン心理学研究所を設立した。アメリカに移住後は、臨床心理学の研究に従事する。
- (38) Vgl., "Was nicht" S. 48. 『回想録』、八六頁参照。
- (39) 『入門』、四四〜四五頁参照。
- (40) Vgl., "Was nicht" S. 52. 『回想録』、九一頁参照。
- (41) Vgl., "Was nicht" S. 55ff. 『回想録』、九八〜一〇〇頁参照。